

藝大通信

No.08

TOKYO GEIDAI
東京芸術大学広報誌



「転位95 - 地 - 」
etching lithograph 二版刷 44×34.5cm 1995年

中林忠良（なかばやし・ただよし）

1937年東京生まれ。
1963年東京芸術大学絵画科油画専攻卒業。65年同大学院修了。78年版画研究室講師、81年助教授、89年から教授。99年4月から評議員。2003年紫綬褒章受章。
「転位」シリーズは、白と黒の拮抗と調和がテーマ。日常に潜む浮遊感を支点とし、自身の足元を握りおこす試みがなされている。作品はやがて、地の生と死の深さに囚えられ、それが描くこと（黒）描かないこと（白）という制作のしくみとからみ合せて、白と黒の世界に収斂した。

東京芸術大学広報誌 藝大通信第8号

編集発行 東京芸術大学広報委員会

編集委員 野田暉行（副学長・音楽学部作曲科教授）
長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）
渡邊健二（音楽学部器楽科助教授）
太田和良幸（事務局長）

アートディレクター 蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）

制作 株式会社 G凡社

発行日 平成16年3月20日

お問い合わせ先
東京芸術大学総務課
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
電話 03-5685-7509 FAX03-5685-7760
e-mail jkikaku@off.geidai.ac.jp URL <http://www.geidai.ac.jp>

第8号目次

3 11 特集 芸大の新しい発信基地、取手。

4 7 【座談会】改革の拠点として。
取手校地の12年とその未来像をさぐる
飯野一朗 / 渡辺好明 / 小山穂太郎 / 西岡龍彦

8 9 学科紹介 先端芸術表現科 藤幡正樹
音楽環境創造科 熊倉純子

10 11 取手キャンパスを歩く 案内人・田中一幸

12 13 NEWS 2003.11～2004.2
何が変わるのが「大学法人化」

14 15 タイムカプセルに乗った芸大
【第8回】1971～1980年
佐藤道信 東京芸術大学美術学部1970年
瀧井敬子 東京芸術大学音楽学部1977年

16 17 開かれた大学
学生オーケストラ
海外へ地方へ、活躍の場が広がる 有賀誠門

18 19 学生のいる風景
国際交流会館
都心から離れた留学生の拠点 趙 洗淵

20 23 芸大短信2004.4～2005.3

20 21 春から夏への大学美術館
再考：近代日本の絵画 美意識の形成とその展開

22 23 春から夏への奏楽堂
藝大ドヴォルザーク・プロジェクト

第8号刊行にあたって

芸大は歴史的な上野公園内のほかに、取手市の利根川のほとりにもキャンパスを展開しています。新しい校地で芸大は何を成すべきか、未来に向けての検討が重ねられるなか、先陣として美術学部による授業が開始されたのはもう12年も前になります。施設や交通のまだ整備されていない初期の開拓期に、孤軍奮闘、並々ならぬ苦労と努力を重ね未来を切り開いたパイオニアたちを改めて労いたいと思います。それは現在への大きな可能性に繋がり、新しい時代へ向けた「先端芸術表現科」の開設となりました。それに続き、近年「音楽環境創造科」も開設されました。共通工房としての役割とともに、取手校地の意義は年々新たに深められ、また問われ続けております。

今回は、この取手キャンパスの未来へ向けての展望と現実の問題点等を現場の先生方が語るとともに、取手校地の紹介をいたします。

上野とはまたひと味違った取手にぜひ一度足をお運びいただきたいと思います。

さて、この芸大通信も8号を迎えました。いよいよ法人化の年を迎えますが、この小誌もこれを一つの節目と捉え、来年度から新しい企画と方針で出発する予定です。

ご愛読に感謝するとともに、ますますご愛顧のほどよろしくお願い申し上げます。

藝大通信編集委員長
副学長（企画担当）
野田暉行

特集

芸大の新しい発信基地、取手。

発展を続ける取手校地を
現在・過去・未来をテーマにした座談会
先端芸術表現科・音楽環境創造科の紹介
そしてキャンパス・ガイドから明らかにする。



改革の 拠点として。 取手校地の十二年と その未来像をさぐる

芸大が一年生をはぐくむ培地として、
学部教育の展開をめざし、
取手校地に新たな場を求めて、十二年の歳月が過ぎた。
共通工房は、最大級の規模、設備を誇り、学科をまたいだ
複合的なカリキュラムも成果をあげつつある。
大学院までの一貫した教育を行う先端芸術表現科が加わり、
さらに一昨年、音楽学部も、音楽環境創造科を新設した。
地域に根ざし、国際性を持つ教育研究の拠点として、
取手校地の未来像を両学部教官が熱く語り尽くした。

取手校地の展開

渡辺 取手校地が開校したのは一九九二年（平成四）四月です。当時私は美術学部の絵画科（油画）の助手で、上野校地から取手への移転に携わって以来、十二年間ずっと取手校地を担当しております。当時を振り返ってみると、最初に九一年に共通工房ができた。共通工房は、大学院を中心とした大型の加工施設、上野にはない各科で共通利用できる大型の加工施設を取手に展開するということでした。

翌年には美術学部としての展開が始ま

つて、油画の一年生がまず先鞭を点ける形で展開して、それに伴って一部の大学院、私が担当していました壁画の研究室デザイン科では内山先生の映像の研究室が展開する。共通工房と連携しながら、取手の最初の授業が始まったわけです。

美術学部では、取手校地において大学院を中心とするのか、学部の一部の展開あるいは一部の科（デザイン科）を中心とした展開にするのか、移転直前までさまざまな議論があったわけですが、一年生の基礎教育を複合的に取手で行うのがいいのではないかとという結論に達して、それに基づいて油画、デザイン、日本画工芸、彫刻、建築と順次、展開してきたわけです。つまり、上野に対して取手が一年生の基礎教育の場であるという位置づけになったのです。その趣旨としては低学年において各科の垣根をある程度取り払ったところで、複合的に基礎的な技術や技法を学ばすということです。

それ以来、美術学部としては一年間だけの取手キャンパスでの授業と二年生以後の上野での授業との関係を探ってきたわけですが、やはり上野の分校的な在り方は否めませんでした。こうした背景もあって、五年前の九九年に先端芸術表現科という、取手で卒業生を出し大学院生まで育てていく科を新設することになりました。

また、音楽学部としては長らく取手のほうは手つかずだったわけですが、一昨年から音楽環境創造科という、音楽学部として取手校地を積極的にとらえていく

ような科が立ち上がりました。

西岡 音楽環境創造科は、今まで上野でやってこなかったことに取手で取り組もうということと二〇〇二年に発足しました。音楽文化そのものが非常に多様化しているの、音楽だけでなく、音や音響についても考えていく、また、音楽にかかわるさまざまな表現、例えば、映像・舞台・舞踊等についても積極的に音楽の側から研究していく、ということがまずあります。それからアートマネジメントや文化政策です。これは、聴衆を発掘し育て、音楽の創作と同時に聴衆とのかかわりを考えていくというものです。この学科では音楽を、その周辺を含めた広い意味でとらえています。

音や音響については、芸大では三十年以上も前から、音響研究室でアナログ・シンセサイザーを使うなど、世界的に見ても新しい音楽の創作・研究に取り組んできましたが、独立した一つの科として二年前から本格的にスタートしたのです。

飯野 私は共通工房長になって二年目になります。第三学部構想というのが以前にありまして、一つの科を取手にもつてきて、学部を立ち上げていくということとでした。それに伴い、上野ではできない大型の機械や最新の設備をまとめて取手校地で展開し、基礎知識がある大学院生や上級生が使いこなせるようにという形で始まったのです。基本構想としてはまだまだ今後増えていく予定ですが、第一期が完成した状態で十二年間継続しています。

飯野 一朗

いのいちろう



共通工房工房長
工芸科彫金研究室助教授
1949年埼玉県生まれ
1976年東京芸術大学大学院彫金研究生修了
1977～88年東京芸術大学美術学部工芸科彫金研究室非常勤講師
1988年東京芸術大学美術学部工芸科彫金研究室助手
92年講師 94年～助教授
2002年東京芸術大学取手校地共通工房工房長
(社)日本クラフトデザイン協会会員 / ドイツ・インターナショナル・ジュエリー・アート協会会員

田中一幸先生が工房長だった時代に、

一年生はいろいろな基本を教わらなくてはいけない、共通工房があるのだから、素材に触れさせたらどうかということ、素材表現演習を始めました。共通工房自体は、非常勤の教官が運営しているという形になっていますが、できれば常勤の教官が一名いて、たえず取手校地を見ながら積極的に運営できればいいと思っています。今のところは、素材に触れてそこから得たものをどのような形で表現していくかということを中心にやっておりますが、工房が増えて各科が切磋琢磨していく状況がくれば、発展性もまた違った意味をもってくるのではないのでしょうか。

渡辺 取手の共通工房は、世界中の大学を見渡してもこれだけの加工施設を持っているのは驚くべきことで、つくれないものはないのではないかと、というほど立派な施設です。活発に利用されていると思いますけれども、実質的には非常勤の人たちだけで運営されているという現状は大きな問題で、しっかりとした体制を

とっていくべきだと思います。

飯野 私自身工房長といっても、本拠地は上野にある工芸科の彫金講座の一員で、実際は各工房をとりまとめる立場だといえます。また、現状の表現主体ではなくて、素材別の工房になっているという点も、少し考える必要があると思います。ゆくゆくはセンターを統括する長のもとで、運営されていく場にすることが望ましい形でしょう。

一年生にとっての取手

小山 私は専任になって五年目、その前も非常勤でいましたので、取手校地には長くかかわっています。油画科で一年生の複合授業を受け持ってきたので、取手はそれをやる場だという印象がありました。つまり科の枠をはずして、一年生の基礎学習をやる。ほかの科の先生と組んで新たな授業を構成する、基礎を固定して考えるのではなく、常に新しい問題をも取り込んで考える場であるという認識です。

ただ、すべての科が同じことを横並びでやるのではなくて、柔軟な場が必要だろうと思います。先端に続き音楽環境創造科もできたことで、サウンドスケープのような考え方も入ってきています。環境の捉え方や作品の設置に対する考え方も変わってきています。油画科でも先端・音環をはじめ、それ以外の科ともかわることによって、基礎教育のなかでも新たに必要なのが発見されていく、起こりうるのではないだろうか。

また大学院は、美術学部からは油画科が一つと壁画が二つの研究室の学生と教官が取手に来ていますが、少ないというのが現状です。先端が大学院の活動を始めて、やはり新しいシステムを考えている。従来の美術学部の大学院は研究室単位で、先生と生徒が密な関係で責任をもってやっているのが、先端はグループ、プロジェクト制にしているなど、授業の進め方も違います。大学院での研究と実践という点でも、ほかの科や研究室とかわる場を今後どのようにつくっていく

かが、課題としてあると考えています。

渡辺 取手の基礎教育なのですが、先端芸術表現科ができて大きく変わったことは、美術学部にとって必要な幅広い授業科目を多数開設して、ほかの科の学生たちも受講できる体制をとっているところでしょうか。先端の開設科目は、基本的に全美術学部生あるいは音楽環境創造科の学生も履修できるようになっています。メディア教育棟が立ち上がって、講義室も整備されましたし、図書館の分室など、大学にとって基本的なインフラがだいぶ充実してきたと思います。

現在、取手校地で一年生において行われている複合選択実技授業は、まだ限られた期間での限定的なものに留まっていますが、さらに多くの科が参加してさまざまな授業展開が図られるようになればいいと思います。早速、音楽環境創造科と先端芸術表現科の間でも共同のプロジェクトや、集中講義や特別講演会の共同開催も随分行われていますね。

上野との距離

小山 取手に一年生が入ると、慣れない環境であっても、工房もあるし先端開設の新しい授業もあるので、大変刺激的であると思うのです。意外と自主的にいろいろな所へ出かけていく学生が多いのです。ところが、二年になって上野に移ると、今度は上野の一年生で、自分の場所がない。なおかつ一部大学院生以外は、取手には上級生がいなかったのに、上野は上級生たちが主体で活動している場であり、自由に行っていた取手の一年生の気分ではやれない。実際に、上野に移ると、学生の作品が実際のスケールだけでなく少し小さくなってしまふという印象があります。

渡辺 取手でもいろいろな授業が開設されていて、上野の学生も受講することはできるのです。ただ、この距離というのはいかんともしがたくて、上野との有機的、あるいは発展的な関係はなかなか難しい。

西岡 音環では、学生が金曜日に上野で授業がとれるようにしたのですが、随分受講しています。音楽学部の場合、副科という専門と違う楽器のレッスンを受けられるのですが、取手では無理なので、上野で受けられるようにしています。でもまだ全体的にはうまく交流はできていないので、大きな課題だと思います。

渡辺 先端も音環も四年間ずっと取手なので、上野へのあこがれみたいなものがあるようです。一、二年生の間は、こち

らで授業がかなり密に組まれているわけですが、上級生になると上野で開設されている授業を積極的にとりに行くようになる。だから上野のほうでも、取手で行われていることに継続的な関心をもってこちらに来てもらえるようにアピールしていく必要があると思います。

小山 先端ができて、新しい先生が一時にそれまでと違うやり方で授業を始めたことで、私たちも、いろいろな試み方があるものだと思います。ただ、一年生担当の取手のなかとはとまかく、上野の上級生までやろうとするのは、少し無理がある。そこで、基礎教育を一、二年を通して取手でやるとか、共通で基礎授業を考え出して、先端や音環がほかの科と交流する授業をできればいいのではないかと考えます。

飯野 一年生を取手に展開させるにあたっては、逆にこの地の利をうまく利用して、気持ちをリラックスさせて、それを上野に持っていければいいんですけど、また向こうで上野の一年生という形になると、うまくつながっているかわからないですね。一年間我慢すれば上野に行ける、といった腰掛け的に思っている学生もいるかもしれません。

改善・変革のポイント

渡辺 美術学部においては全科の一年生が取手に一年間だけ展開する、という方法が本当に最善なのかを、改めて見直すべき時期にさしかかっているのかもしれない。科によっては上野で一年生から

渡辺好明

わたなべ・よしあき



先端芸術表現科助教授

1955年兵庫県生まれ

1980年東京芸術大学美術学部絵画科油画卒業

1982年東京芸術大学大学院美術研究科壁画研究室修了

1985～89年DAAD（ドイツ学術交流会）奨学生として

デュッセルドルフ美術アカデミーに留学

1989年帰国して常勤助手として東京芸術大学に赴任

1992年絵画科油画 / 大学院壁画研究室講師

1999 - 先端芸術表現科発足に伴い移籍、先端芸術表現

科助教授

始める科があってもいいだろうし、こちらで二年まで、あるいは場合によっては四年までいられるような体制をとっていくことも考えていかもしれないです。

西岡 やはり上野から学生がこちらにたくさん来るような、興味をもってもらえるようなものを設定したいと思っています。教官は上野から、応用音楽、音楽文芸、楽理科や音楽科から毎週常勤の先生に来てもらっており、取手の発展を意識してもらえようになりました。また大学院についても、音楽学部として取手で大きく展開できるようなことがあるのではないかと話し合っています。

小山 また、別の捉え方ですが、一年生で複合授業と一緒にやるのは、それぞれの科に基礎教育として独自にやっておかねければならないことが多くあつてなかなか難しい面があるという意見も聞かれています。大学院レベルなら、相当な程度自分たちでやっていけるので、ジャンルを越えた活動ができるかもしれません。

渡辺 現時点ではやはり一年生の展開がありますから、大学院の取手への展開というのは非常に限られた範囲でしかないのです。むしろ軸足を大学院に移して、大学院がこちらにもっと積極的に展開できるような体制に変えていくことも考えられます。

飯野 工房には大学院生もずいぶん来ていまして、例えば鑄造工房に彫刻が行くとか、石材工房に行くという形で、年間利用者数というのは相当多いです。

ほかには二工房ですが、九月に公

開講座を開設しています。松戸から取手近辺に住む二〇歳から八五歳くらいまでの人たちが、各工房二〇名くらい集まって、一週間ほど受講されていきます。工房によつては、そのような公開の仕方、地域との関わりあい方も大いにできるかと思っています。

地域との取り組みについて

渡辺 「取手アートプロジェクト」は今年で五回目になりますが、その背景としては「取手校地創作展」(二〇〇三年から「アートパス取手」と改名)という一種のオープンキャンパスによる展覧会が十年以上にわたつて毎年行われて来たことがあります。いずれもここで行われている創作活動を地域の人たちや社会に向けて発信し、広げていこうという発想に基づいています。とりわけ「取手アートプロジェクト」では、大学を外に向かって開いていくだけではなく、地域の人々とともに考え、つくっていく姿勢を鮮明に打ち出すことで、芸大に対する、あるいは芸術に対する関心を広く呼び覚ましていきたいということです。同時に、こうした活動の積み重ねによつてアーティスト、表現者が定住していく地域創造につながっていけばと思うのです。

大学に在る間は恵まれた環境にあるわけですが、それでも、社会に出ると制作場所を確保するのもままならない。そういった文化の土壌づくりを、大学として積極的にやっていくべきではないか。学生の間だけ面倒を見るだけが大学の役割では

小山穂太郎

こやま・ほたろう



絵画科油画研究室助教授
1955年東京生まれ
1982年東京芸術大学美術学部絵画科油画専攻卒業
1984年東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了
1987年同大学院博士課程満期退学
1994～96年フランス(パリ)滞在(文化庁芸術家在外研修員)
1996～99年東京芸術大学美術学部非常勤講師
1999年～東京芸術大学美術学部助教授

なくて、社会にどう出していくか、出て行った社会の環境をどうつくっていくかということにも、大きな役割を担うべきなのではないでしょうか。先端が始めたものですが、現在では全学的な取り組みとして、音楽環境創造科の教官、学生にもかかわっていただいています。アートと社会、地域の結びつきをコーディネートする仲介者を育てていく必要もあるということです。

また、取手アートプロジェクトの企画として隔年で行われている「オープンスタジオ」では、取手在住の郷土作家や芸大関係の卒業生たちが、どんな制作場所かどうかを考えて制作しているのかを、近隣の人たちにも知っていたところで制作しているんだつたら、うちの納屋を貸してあげよう」という話になっていけば、それが呼び水になって、ここに住むアーティストが増えていくわけですね。

小山 ある種のレジデンスのように、例えば取手市内にある空いている場所を利

用して、国内、または、海外から来た作家が滞在して制作する機会をつくるか、いろいろな交流の場を作れると思うのです。

海外では、公共の建物をつくったときに、アーティストがスタジオとして使える場所を用意するケースもあるそうです。すると、若いアーティストが経済的に大変な時期に制作に専念できる場ができる日本にはないわけですが、取手市に始まり、それが広がっていけばいいと思います。実際に壁画の工藤先生も取手市に提案して、実現を目指して働きかけています。単に場所というメリットだけではなくて、同時にオープンスタジオや、そのほかに公共的なものもかわるような美術の活動があれば、芸大の活動自体も広がるのではないのでしょうか。

渡辺 上野のようにかなりの歴史を持つ場所ではなくて、取手という手つかずの土地に芸大が来た意味は大きいかもしれません。アーティストなるものが大勢集まることによつて初めて生まれてくる

可能性があると思う。そのために、われわれのプレゼンスというのは、市民に対していろいろな形でアピールしていかなければいけないし、一緒にいろいろ話し合っていく機会を積極的にもたないといけないのではないだろうか。

キャンパス内で行われている公開講座や、ゲストをお呼びして行う講演会、あるいは学生が仕掛けているイベントがかなりあり、学内の人たちだけではなく、一般の方にもぜひ来ていただきたいと思っています。例えば取手の駅前に、芸大でのイベントを告知できるように広報窓口や掲示板などを置けば、随分関心をもつてくださるのではないだろうか。

飯野 公開講座は地域の人にとって、年一回の楽しみなのです。ここできつかけをつかんだ方が市の援助や近隣の協力をいただくなりして、拠点が増えていけばいいと思います。取手近辺の人と協力し合って、説明して積極的にそういう方向に動いていただけるようにしたいものです。

大学院の展開

西岡 平成十八年度には音楽環境創造科の大学院ができる予定です。単独の音楽環境創造科でできることより、もっと大きな可能性を秘めた大学院というのを、今構想しているわけです。例えばCOEにも対応できるような大きな視点が今の大学には求められていますので、そういうことも見据えて考えられるような組織ができないだろうか。それから、上野は手狭で場所がありませんので、上野でできなかつたような設備をこちらに置いて、しかも世の中と直接接点があるようなものがこちらでできればと、現在構想中です。

渡辺 昨年から先端でも大学院ができました。学部との単なる連動性だけでなく、本学の他科の大学院や他大学とも積極的な関係を築いていくことが重要になるでしょう。単にエスカレーターで学部から上げていくだけではなく、多彩な顔ぶれの教官に対して、大学院ならではの

幅広いジャンルから改めて人材を集めることによって、新たに生まれてくる可能性を見ていきたいと思っています。

大学院の今後を考えていくことは、まさにこの取手校地が上野に対してどう特色を出していけるか、COEの話が出ましたけれども、新しい形で受け皿になつていくような方向性を強く打ち出せるかということと密接に結びついた課題だといえるでしょう。

小山 取手の利点として、制作には十分な場所があつて工房も充実しているのですが、それだけで終わっている部分があつたと思います。それに対して上野は、美術館やギャラリー、そのほかにもいろいろな活動をしている場所に出かけて行くには、非常に便利です。取手のなかに、ほかとかかわりいろいろな人も集まれる場所が今後作れるかどうか、課題でしょう。

また、取手ではもっとと複合授業を基礎教育でやればいいですし、大学院での授業もリンクさせるような形をとるとうまくつながってくると思います。今までの芸大の横並びでみんなが一緒に行う状況を考え直して。取手の特性、各科の特性を生かして、いろいろな活動があちこちから出るようなシステムを持ったほうがいいと思います。

渡辺 活動の拠点としては、上野であり取手であるでしょうけれども、かわつていく対象は別に取手や上野ではないわけです。活動の場所はある意味では世界中なわけで、そういう積極的な発信の拠点として、取手が上野とは異なつた独自の

の視点から国際的にアピールするものを打ち出していけるか、というところにかかっていると思います。その可能性は十分にあるのではないだろうか。

西岡 音楽環境創造科は、防音設備のないメディア教育棟のなかで学科が活動しているの、音の問題があります。広い取手校地には、のびのびと音が出せる可能性があるので、学生のためのよい施設ができれば、上野との距離も非常に近くなります。

飯野 ここが独立採算ですべてできるためには、一年から大学院まで展開している科を中心にしっかり充実させて、取手校地をリードしていくような形にならないといけないでしょう。工房はそれをつまみ食いしていく形で、上野にはない大型のものを扱っているわけですから、自分である程度技術も知って、造形力もその素材も知つた人たちが展開してくればいちはだ活躍できる場だと思います。

渡辺 いずれにしても取手の発展というのは、上野と違う形をいかにここで新鮮に打ち出せるにかかっていると思います。そのためには、今までの経緯はさておき、独自の展開を図り、さまざまな挑戦や実験を重ねていくことが重要だと思います。上野での両学部、各科の利害や、音楽や美術というジャンルやカテゴリーを超えて、取手ならではの形をいかにみんなで知恵を出し合つてつくっていくか。本当の意味での複合的、横断的な展開を、斬新な形で行っていくこと、私はそこに期待したいと思っています。

西岡龍彦

にしおか・たつひこ



音楽環境創造科教授

1952年大阪生まれ

1975年東京芸術大学音楽学部作曲科卒業

1977年東京芸術大学大学院音楽研究科作曲課程修了

1984年桐朋学園大学音楽学部非常勤講師

1991年東京芸術大学音楽学部非常勤講師

1998～2002年洗足学園大学音楽学部助教授

2002年～東京芸術大学音楽学部教授

ボーダーレス化が進む芸術の状況を踏まえて
取手校地に新設されたオリジナリティ溢れる二つの学科。

学科紹介

先端芸術表現科

藤幡正樹

先端芸術表現科も、設置以来五年の歳月を経て、平成十五年度には大学院がスタートし、創作活動面でも研究活動面でも、いよいよ生産的な時期に入ってきた。

この一月には二期生の卒業制作展示が、「Project the Projects」と名付けられ、都内新橋の旧桜川小学校で開かれた。展示会は、場所の選定から展示の実現、カタログの制作まで、教官側はほとんどなにも手伝わることなく、すべて四年生が実現した。これは、展示を実現する学生達自らのことを「プロジェクトを行う者」「プロジェクトと呼ぼつ」という考えから始まったのであり、作品一点一点の質もさることながら、運営実現の手法としても評価できるものであり、場を作るところから始めることを提唱してきた、この学科の方針に沿ったものであった。

へむけた「授業」として、「素材と創造性」「コミュニケーション・デザイン」「地域と芸術」「言語と身体」「科学技術と表現」といった五つの領域分野が設置されている。学生は、これらの領域と接点を持つことで、個人の制作とは多少違った角度から、自分の立場を客観的に再確認してほしいのだ。また、多くの教官がこれらの領域にまたがって活動しており、教官にとってもほかの教官と共同で運営していく領域分野の活動は、次第に大学院らしい充実したものとなってきた。

開いていくための美術とは何か、について考えていきたいと思うからである。未来に向かってどのような生き生きすべきか辛辣に考えれば、美術という分野が単にある一部の趣味の世界、閉じた特権的な場所ではないことがわかるはずであり、それが危機的な状況にあることも理解されるはずである（このあたりの議論は、昨年出版した『先端芸術宣言!』（岩波書店刊行）に収録しているのでぜひ、参照していただきたい）。

このところ、学科関連の展示が相次いでいる。取手では「素材と創造性」のメンバーの展示が開かれており、三月には別の領域の学外展示も開かれることになっている。それぞれが異なったスタンスで、異なったアプローチで活動をしており、それらが常にルーチン化されることなく、行われているのも、この学科の特徴といえるだろう。

（ふじはた・まさき／美術学部先端芸術表現科教授）



右：IMA演習。長谷川祐子講師
上：IMA演習。西條朋行講師





上：ディーン・モス客員教授による舞台映像論の講義風景
左：熊倉純子助教授による映像基礎演習

音楽環境創造科

熊倉純子

平成十四年四月に新設された音楽環境創造科は、音楽学部では初めて取手校地に拠点を置く学科である。ちなみに音楽学部にとって新学科の設置は約五十年ぶりのことだ。

学科が設定している目標は、

映像 身体表現 先端的テクノロジーと結びついた音楽表現の可能性の追求。音楽・音響・美術・映像・舞台芸術などのさまざまな領域にまたがる知識と感性を備えた人材の育成。芸術と社会のかかわりについての総合的な考察、および新たな音楽環境・文化環境の創造。表現領域は広範におよぶが、要は「つくり手」と「つなぎ手」が共存・協働する場となり、学生が両者の視点をあわせもつようになることを目指している。

現在在籍している学生は、一期生二〇人と二期生二二人の四一人。年次進行でカリキュラムもスタッフも発展途上だが、今は専任教員四人と非常勤助手五人、学生も教員もスタッフも多彩なバックグラウンドをもつ面々が集まって試行錯誤を続けている。

入試では芸術的技能を試す

実技試験は課していない。ゼンター試験と小論文によって学力と論理性が問われる一次試験で数が絞られた受験生は、二次試験の面接で演奏・パフォーマンス・プレゼンテーションのいずれかの形で自己表現を行ない、創造性、企画力、コミュニケーション能力などをアピールする。技術も芸術の専門知識も問わないため、入学時には一般大学の学生と変わらぬ芸術観をもった学生が多いのもこの学科の特徴だが、社会的バランス感覚に富む彼らは、学科にとって非常に貴重な人材である。また、これまでは毎年数名の社会人経験者も入学している。

多様な領域をカバーするカリキュラムの中核を成すのは「プロジェクト」という実践授業で、このなかで学生は共同作業を行ない、企画・制作・運営能力を養うことになる。一昨年は、六月に行なわれたメディア教育棟の竣工記念式典の際、学科のお披露目を兼ねた「音の環」プロジェクトを実施し、空間、映像、メディア、身体などとさまざま

まに絡む表現を展開したが、入学したばかりの一期生たちは慣れない共同作業に戸惑い、人間関係に悩みながらも、なんとか短期間でプロジェクトを実現させた。また、十二月の創作展では上野校地から演奏家の先生をお招きし、「音のアトリエ」と題したトーク・コンサートを開催し、生の聴衆の反応に学生たちは現場の実感を少し体験した。昨年は一・二年生が合同でさまざまなプロジェクトに取り組み、アートパス取手で美術学部と共同でワークショップを開催したり、取手アートプロジェクトで地域社会に出てさまざまな企画を実施したり、実践授業は徐々に学科の外へと展開しつつある。

今後も、音楽と美術、取手と上野、芸大と社会の結節点となるべくフィールドワークを続ける音楽環境創造科だが、われわれのアプローチに、ぜひ多くの方のご協力をお願いしたい。
(くまくら・すみこ/音楽環境創造科助教授)

1 美術学部共通工房

取手校地自慢の共通工房は6つの工房で構成されています。金属工房の3工房（金属機械室・鋳造室・金属表面処理室）、木材造形工房、塗装造形工房（化学塗装・漆）、石材工房。

卒業・修了制作のための大型作品の加工にも対応した設備で、非常勤講師が指導にあたっています。使用は申し込み制になっています。



美術学部3年生がブロンズの流し込み作業を行っているところ。



取手キャンパスを歩く

敷地面積164,095平方メートル、
1991年(平成3)10月4日に開設された広大な取手校地。
豊かな自然のなかに先端的な施設が展開する
キャンパスの隅々を、田中一幸前工房長がガイドする。

取手校地には、美術学部の共通工房を中心に、先端芸術表現科のメディア教育棟も完成して、現在、音楽棟が建つまでの間共用している美術学部（絵画・彫刻・工芸・デザイン・建築の各科）1年生と先端芸術表現科、平成14年に新設された音楽学部音楽環境創造科に加え、平成15年度には大学院美術研究科先端芸術表現専攻が設置されました。利根川河川敷の地形を生かして建てられた様々な施設をみていきましょう。

案内人・田中一幸

たなか・いっこう

工芸科木工研究室教授

（前・美術学部共通工房工房長）

1943年神奈川県生まれ

1967年東京芸術大学美術学部工芸科卒業 70

年東京芸術大学大学院美術研究科鋳造専攻修了

1986～89年東京芸術大学美術学部講師 90～

99年助教授 2000年～東京芸術大学美術学部

教授



4 美術学部登窯

取手校地のなかでも最も古い施設で、開設前の1989年、東北工芸部と共同して研究した時に初めて使われました。山の傾斜を生かした、登り窯としてふさわしい場所に設けられています。現在では年に数回使用していて、最近では市民に開放することもあります。



5 野外制作場

陶芸専攻の大学院1年生が、建築実験をする場所です。

キャンパスのなかには、絵画科（日本画）が使う和紙の原料になるコウゾ（楮）ミツマタ（三椏）や、漆に用いる漆の木が植えられています。





〒302 0001
茨城県取手市小文間5000番
地 電話0297-73-9111
(事務室)
J R常磐線取手駅東口から
大利根交通バスで約15分
(約5.9km)「東京芸術大学
前」下車



取手校地の開設式典にあわ
せて建立された記念碑「理
想」。平山学長の揮毫です。



6 7 短期学生宿泊施設・ 福利施設

食堂や購買部のほか、集中して作
業する学生のために、宿泊設備も
設けられています。



8 大学美術館取手館

平成6年8月に竣工し、建設当初は
芸術資料館取手館と呼んでいまし
た。収蔵が中心ですが、展示ス
ペースを増築予定です。把手のデザ
インは澄川前学長によるなど、美
術学部の教官の作品で飾られてい
ます。設計は六角鬼丈教授です。

2 3 メディア教育棟・専門教育棟

メディア教育棟は2001年の10月に第 期、翌02年
の6月に第 期が竣工した、芸大の新しい顔ともい
える建物です。美術学部先端芸術表現科と音楽学部音
楽環境創造科の教室や講義室を中心に、附属図書
館の分室のほか、インターメディアスタジオ、仮想
現実感スタジオ、音楽プロジェクトルームなど先端
的な設備をもった施設が入っています。



5階のバルコニーから見た利根川。